

## メディアリテラシー

兵庫県立神戸甲北高等学校教諭 山上 通恵

最近、メディアリテラシーという言葉をよく耳にする。リテラシーとはもともと「識字力」のことであり、「読み・書き」の能力をあらわしている。その前に「メディア」が付くのであるが、このメディアの定義が広範であり難しい。

技術の急速な進歩だけを背景にこの「メディア」を捉えると、メディアリテラシーはインターネットや携帯電話といったシステムや情報機器の活用能力になってしまうが、メディアリテラシーはそのような時代の変化で揺らぐものではない。

実は日本では、戦後まもなく国語教育においてメディアリテラシーが取り上げられている。昭和27年から29年に使用された光村図書の『中学新国語 言語編』には、当時のメディアである新聞やラジオ、雑誌、映画を軸に、「メディアの特徴」「社会的意義」「制作過程」「受信の仕方のマナー」「内容の選び方」について説明文がある。

また岩波新書の『メディア・リテラシー』（菅谷明子著）では、メディア教育発祥の地「イギリス」、メディアリテラシー先進国「カナダ」、メディア大国「アメリカ」などが紹介されている。各国での解釈は微妙な差異を感じるが、私には「国境を接するアメリカのテレビ番組が垂れ流し状態で、このままでは子どもたちがアメリカ人のものの見方や価値観を身につけてしまい、自国のアイデンティティを失う」という危機感から始まったカナダのメディアリテラシー教育が最も理解できた。

Media Literacy Project in Japanは「メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創りだす力をさす。また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという」と定義している。前述のいずれの国の実践も、確かに

メディアリテラシーを「メディアをクリティカルに理解していく学習」と捉えている。ただし日本では「クリティカル」という言葉が「批判的」と訳され、「否定的」というネガティブな意味合いを含むかのような解釈があるが、これは大きな誤りである。「クリティカル」とは「適切な基準および根拠に基づき、論理的で偏りのない思考」という意味であり、「否定的」とは対極にある非常に前向きなものである。

一方で、これまでのメディアリテラシーの考え方が、新聞やテレビ、ラジオなどのマスメディアが発する情報に対して、「素人である一般市民が受信者としてどうあるべきか」という視点で捉えられていた点は、大きく変化を求められている。すなわち、インターネットの利用により、一般市民が情報の受信者であるだけでなく、情報の発信者になってきていることにより、メディアリテラシーの指導において、「素人が発信する情報に対する受け止め方」および「責任ある情報の発信者としてのあり方」の比重を高める必要が生まれてきたということである。

このような点もふまえて、元サンテレビチーフアナウンサー林英夫さん、大阪大学大学院人間科学研究科教育工学講座助手の西端律子さんとともに、情報 Books Plus! シリーズの一冊として『メディアリテラシー』を作った。メディアリテラシー学習の入門書・実習書として、情報教育や総合学習の場面で活用いただければありがたい。

## 《参考文献・参考URL》

- ・『国語科メディア教育への挑戦 第2巻 小学校編』  
2003 中村敦雄 明治図書
- ・『メディア・リテラシー』  
2000 菅谷明子（岩波新書）
- ・Media Literacy Project in Japan  
(<http://www.mlpj.org/>)
- ・『メディアリテラシー』  
2004 山上通恵・林英夫・西端律子（実教出版）

※本稿では原則として「メディアリテラシー」の表記を使用していますが、書名および引用した文章については、原著の表現を尊重し、「メディア・リテラシー」と表記した部分があります。